

『星空のかなたに』

柴野千栄雄

〈時〉 〓 現代 (二〇一〇年頃)

〈所〉 〓 東南アジアの某国。

〈人〉 〓 武生少年サッカーチーム 〓

- ・ 中西健二
- ・ 山口真一
- ・ 藤井忠夫
- ・ 高木 茂
- ・ 酒下晴彦
- ・ 伊東大輔
- ・ 池田 宏
- ・ 山下千晴
- ・ 上田 守
- ・ 今井和宏
- ・ 水野智実
- ・ その他

〓 ゴミ山のチルドレン 〓

- ・ チュウバ
- ・ ムウアーラ
- ・ トウーリ
- ・ アリユー
- ・ クオート
- ・ チエゲ
- ・ ドンゴ
- ・ ミユウヨ
- ・ ジュウエリー
- ・ ルーシー
- ・ スアドウ
- ・ アンデュ
- ・ カマデ
- ・ ラングレイ
- ・ ジーリア
- ・ ワイゼラ (登場せず)
- ・ その他

〓 日本の大人たち 〓

- ・ 引率役員
- ・ 保護者 A
- ・ 保護者 B
- ・ 添乗員

〓 露店通りのチルドレン 〓

- ・ ウーガン (絵はがき売り)
- ・ ボロンマ (置き去りにされる子)

〓 現地の大人たち 〓

- ・ ホテルの従業員
- ↑ ↓ ・ 女の子を置き去りにする母親
- ・ ゴミ回収業者
- ・ 警察官 2〜3人

〓 その他、ホテルの旅行者や現地の人々 〓

- ・ テイラー
- ・ ガントーヤ
- ・ その他

\* 便宜上、言語や貨幣単位などは日本のもの (日本語、円) で統一してある

\* 挿入歌「かあさんの歌」 (窪田 聡 / 詞・曲) の初出は昭和33年である。

従って本作の時代とは合致しないものであるが、作品の趣旨から敢えて使用した。

東南アジアと思われるある国の高級ホテル・ロビー。

西欧風に設えられたたずまいだが、静かに流れる音楽と共に、どこことなくその国の雰囲気が感ぜられる。例えばグサン・マルトハルトノ詞・曲「ブンガワン・ソロヘソロ川」などを使用。しかし国が限定されない方が良い。

柱に渡して掲げられた横断幕には龍などのカットがあしらわれた中に「アジア少年サッカー協会親善試合／観迎・武生少年サッカーチーム」と、慣れない手つきで書いたと思われる文字（注Ⅱ観迎↓歓迎、小年↓少年の文字の間違いや、サッカーの詰まり字や、音引きが抜けている）が見られる。

「武生少年サッカーチーム」が親善試合のために遠征してきたのだ。スケジュールでは今日は観光の予定に成っているのだが、バスが来ないのでメンバーたちは朝から時間を持て余している。

午後、ロビーのソファーにはあちこちと旅行者が憩いでいる。フロント前の空間当たりにはサッカーチームの少年たちがたむろしている。先程集合を掛けられて三々五々と集まってきているのだ。声高に話している者やふざけ合っている者、なかには床に座り込んでゲームをしている者など。次第にざわついた雰囲気が増してくる。

と、いきなりサッカーボールが飛んでくる。少年たちの中に混じっていた健二が素早くそのボールを受け、飛んできた方に蹴り返す。ボールを追って出てきた真一がそれを受ける。健二と真一そして幾人かの少年たちが入り乱れてサッカーを始める。取り巻いている少年たちも応援歌を歌い出すなどして囃し立てる。

やがて健二が思いっきりシュートすると。ボールは見事に植木の間を抜けてソファーに吸い付くように決まる。少年たちの歓声と拍手。

しかしいきなり騒ぎ出した少年たちの傍若無人な行為は、ロビーで静かにくつろいでいる他の旅行者からの響響ひびきを買うものであった。

別室で打合せをしていたと思われるチームの引率役員と保護者A、B、それに添乗員らが驚いて出てくる。

保護者A「静かに、静かに。みんな静かにしなさい。

引率役員「こんな所でお前たち何をやっているんだ。ここはコートではないんだぞ少年たち」……

保護者B「他のお客さんらが迷惑してるでないの。少しは考えなさい

池田 宏「……先生、今日は何するんですか

保護者B「今日は、スケジュールでは観光の予定だったけど、バスが来ないもんだから、これから市内に出て、歩いて行ける所などを少し見て回る。

山下千晴「歩いて行くんですか

上田 守「いややな、疲れる」

引率役員「疲れている者や行くのが嫌な者はホテルに残っている。ただし、今みたいに騒

いだり勝手に自分たちだけでホテルの外には出ないように。

保護者A 「治安が良くないって云うから絶対に一人では何処へも行かないように  
山口真一 「二、三人ではあかんですか

保護者B 「グループでも駄目、とにかく子供らだけでは外に出ないように

引率役員 「それではこれから班分けをして町に出かけるが、各班には大人が二、三人入  
から指示に従って、勝手な行動はしないように。

今井和宏 「はい（と、質問の手をあげる）

引率役員 「何だ

和 宏 「あの、トイレの水が流れないんですけど

引率役員 （突然の質問に） 「？

守 「僕んとも流れん。

宏 「僕んともや。ウンチしたら詰まってしまうたわ

水野智実 「ボコ、ボコ、ボコって水が一杯になって、ウンチが外に飛び出すかと思っ

守 「ほやけど、ほっといたらそのうち流れてもたで

宏 「洗濯機みたいに、ぐるぐる、ぐるぐる、水の中でウンチが回って

宏がウンチのまねをしてぐるぐるまわって見せる。

和宏も一緒におどけてまわる。ドーンと、みんなの笑い。

添乗員 「あ、あのー、すみません。昨日はホテルに着くのが遅かったもので言い忘れま

したが、トイレには紙を流さないようにして下さい。紙は汚物入れに入れて水には流  
さないようにして下さい

千 晴 「ええっ、尻拭いた紙を流がさんのけ？

宏 「汚ったねー、トイレが臭なっっちゃうげー

添乗員 「こちらのトイレトペーパーは水に溶けないもんですから、トイレに流します  
と詰まってしまうんです

智 実 「紙がゴワゴワやもんな

和 宏 「尻痛なっっちゃうわ

守 「遅れてるなー

保護者B 「でも、ちよつといやあね

添乗員 （ちよつと困惑気味で） 「反対に、こちらの人が日本に来られたときなどは、紙  
を汚物入れに入れてしまうもので、よくホテルから苦情が出たりします

千 晴 「はい（と、また手をあげる）

引率役員 「何だ、まだあるんか

千 晴 「シャワーのお湯が途中で水になってしまっすけど……、

和 宏 「ほやほや、ビックリしてもたわ。（いきなり水が出て慌てふためく様子を演じて  
みる）

智 実 「ほいてまた急に熱いお湯になったりして、

和 宏 （今度は熱湯が出て慌てふためく様子を演じながら） 「やけどしてもたわ

守 「なんじゃお前は忙しい奴やな

宏 「僕の部屋は冷房が効きません

智実「僕の部屋はゴミが溜まって汚いんです

千晴「掃除して無いんでないのかな

和宏「ゴミブリが出てくるかも知らんぞ

宏「うえー、気持ち悪い！

智実「町に出たら、ゴミブリホイホイを買ってこなあかな。

千晴「ほんな物売ってるんけ？

守「先生、町に出たときファミリールレストランには行かないんですか

宏「ホテルの食事、食べられん」

智実「不味い、不味い。あんな物食べたもんでねえわ

和宏「半分以上、捨ててしまうた

千晴「ハンバーグ……

守「あーあ、ラーメン食べてー

突然少年たちから出た苦情に困惑する大人達。

引率役員「よしわかった。ほんならここで話していても他のお客さんらに迷惑やさけ、会議室に行こう。会議室には監督やコーチも居るし、そこで班分けをしながら、みんなの話を聞く。

添乗員「じゃ、私はホテル側と話しまして、きちんと対応させますので……  
引率役員「お願いします

あわてる添乗員はホテルと交渉するべく走り去る

保護者A「では、会議室に移動、（みんなはゾロゾロと移動を始める）

保護者B「早くしなさい。遅れるとその分、観光の時間が少なくなってしまうわよ

守「バスでは行かんですか

保護者B「バスが故障したらしいの

千晴「ゲ、おんぼろ

守「故障したって……、代りのバスがないんけ？

保護者A「余分なバスはないんやって

和宏「なんじゃそれは、貧乏くせーの、

保護者B「五、六〇年前の日本みたいなどころやって聞いてきたけど、ほんと、どうなっているんやろ。

保護者A「こんな所へ来るのも子どもにとっては良い社会勉強やね

保護者B「子供どころか、わたしらにしても、かなりのカルチャーショック

保護者A「タイムスリップしたんでな気持ちやわ。なんか、面白いんでない

みんなは口々に話しながら、会議室に移動していく。

真一が健二や忠夫、茂、晴彦、大輔などをそれとなく誘いロビーに残る。

山口真一「健二、お前は何遍かここへ来たことがあるんやろ  
中西健二「うん、父ちゃん所の会社の工場がここにあるさけ、夏休みなんか二〜三回来  
たことがあるけどな。」

藤井忠夫「ほんならこの町の事、よう知っているんやろ」

健二「ようは知らんけど、父ちゃんに連れられて町ん中歩いたことはあるけどな。」

真一「ほんなら健二が案内役で、みんな町を探検しようか」

高木 茂「面白いな、よし、行こ、行こ。」

酒下晴彦「先生らに黙って行って、大丈夫かな？ あとから怒られるぞ」

忠 夫「いいって、後で謝ればそれでいいんや。どーって事ないって」

伊東大輔「ほやけど、子供らだけでは絶対に外出禁止って……」

茂 「嫌んなら、お前は来んでいい。みんなと一緒に行けばいいが」

大 輔「……」

晴 彦「本当に大丈夫かな？」

忠 夫「みんなで行けばどーって事ないって」

大 輔「どうする」

晴 彦「行こうか」

真 一「行こ、行こ。」

大 輔「ほやけど迷子になってしもうたら、どうする。」

忠 夫「大丈夫、大丈夫。ホテルの名前さえ覚えておけば、いざって言うときには警察に

連れて帰ってもらうんや」

茂 「パトカーでホテルに帰ってきたらみんなビックリするぞ」

真 一「行こ、行こ、探検隊しゅっぱーつ」

誰に見とがめられる事もなく健二らはホテルを出て行く。一人残る伊東大輔は彼  
らを見送っているが、やがてトボトボと会議室の方へ行きかける。

健二たちが会議室に居ないのに気づいて、戻ってきた保護者A・B

保護者A「大ちゃん一人？ 健ちゃんや真ちゃんらは？」

大 輔「……町を探検するって出て行った」

保護者B「ええ！、」

保護者A「ちよつと、子供らだけで！」

大 輔「健ちゃんと真ちゃんの外に、忠夫と茂、ほれに晴彦も一緒や」

保護者B「何をやっているんや子供だけで！ ちよつと大ちゃん、先生ら呼んできて！」

慌てふためいてホテルの外へ追いかけていく保護者A、会議室に走って行く大輔、  
保護者BはAの後を少し追いかけようとするが、また戻って会議室の方へ走って  
いく。

舞台奥の会議室（と、想定）が急に騒がしくなり、保護者Bを先頭にみんなが騒  
ぎながら出てくる。

外から戻ってきた保護者Aと出くわす。

引率役員「どうでした

保護者A「全然見あたりません。何処行ったんでしよう

保護者B「この国は治安が悪いっていうから。早く探さないと大変な事に……

引率役員「携帯電話は持たせていないし、困ったな。

保護者A「あんだだけやかましく注意してたのに……

引率役員（大輔に）「お前、一緒にいたんなら止めなあかんが

大 輔「ぼくは、子どもらだけで行ったら怒られるって云うたんやけど……

ホテルの従業員「お庭でも散歩しているんじゃないですか？

大 輔「健ちゃんを案内役にして町を探検するって言うてたで

引率役員「んー、（少年達に）お前らは手分けしてホテルの中や庭を探してくれ。（ホテ

ルの従業員に）ホテルの内を説明してやって下さい

ホテルの従業員「はい、

引率役員「保護者の方と私たち大人は二人ずつで町へ出て探しましょう。

添 乗員「警察にも連絡しておきましょう。めったな事は無いでしょうが……

保護者A「ええ

保護者B「まだ遠くへは行ってないでしょうから早くしましょう

そそくさと出て行く大人たち。その緊迫感に比べて少年たちの間には、健二らが勝手に自分たちだけで町に出て行ってしまった事への羨ましさ、不満の方が大きい。そんな雰囲気を知り

引率役員「おまえら、絶対にホテルの外には出るなよ。

ホテルの従業員（何をそんなに騒ぐのか？ と言った感じで少年たちを舞台上手寄りに集

め、的外れの様にホテルの施設などを自慢げに説明する）「このホテルの庭は自然を

生かして、丁度日本庭園のように起伏に富んだ……

大人たちの慌ただしさに気を取られながら、少年たちはホテルの従業員の説明を聞いている。

フロントでは声高に、たどたどしい現地の言葉で警察に電話をしている添乗員

暗 転

## 第 二 景

雑踏、露店が立ち並ぶ。道行く人に声高に呼びかけている人、絶え間なく行き交う人たちがごった返している。

幼い子どもたちが果物やサカナなどを入れたカゴを頭に載せたり、抱えたりして

道行く人に売りつけているがほとんど買うものはいない。

テイラー「おじちゃん、パイヤ買ってくれないか。今朝畑から取ってきたものだよ。美味しいよ（拒絶されると、次の女性に呼びかける）おばさん、安くしとくから買ってよ。おばちゃん、おばちゃん（女性の後を追いかけていく）

サイハン「サカナだよ、さつき川から取ってきたんだ。今までびよんびよん跳びはねていたサカナだ。安いから買ってよ

無視されたり、乱暴に振り払われながらもひつこくまとわりついていく大人も子供もただ生きるために力一杯動いているのだ。乱雑だが活気にあふれている。

そんな中に、小さな女の子の手を引いて放心したように出てきた女性。女性は突然女の子（ボロンマ）の前にしゃがむと何かを話しかける。そしてそのままボロンマを残して人混みの中に去っていく。黙って見送っているボロンマ。その様子を先程から見ていた絵はがき売りの女の子（ウーガン）がそっと近寄ってくる。ウーガンはビニールのヒモをしゃぶっている。

ウーガン「あんた、母ちゃんに捨てられたね

ボロンマはウーガンを振り返る、ちよつと寂しい表情を浮かべているが、決して泣いては居ない。

ウーガン「恨んじやだめだよ。まだ売り飛ばされなかったただけ良かったと思わねりやね。女の子だと良い値で売れるんだ。それ知っててあんたの母ちゃんあんたを売らないで捨てたんだからね。

ボロンマ「村にいと家の者みんなが飢え死にするから、お前はここで一人で生きて行けって。ここなら何してでも生きていけるからって

ウーガン「そうだよ、何したって生きていけるんだから。……あんたあたし達の仲間になんな。一人でいるよりみんなと一緒にの方が心強いからね。だけど、自分のことは自分でやるんだよ。だれも助けちゃくれない。

ボロンマ「うん（よろめく。しっかりと立っていられないのだ）

ウーガン「あんたお腹空いているんだろう

ボロンマ「何にも食わずに……、村から歩いてきたから

ウーガン（口にしていたビニールのヒモを差し出し）「これをしゃぶってごらん。お腹の減ったことを忘れて居られるから。シンナーを吸ってる奴も居るけれど、金が無いからね。それにシンナーは体を悪くするからやらない方が良いよ

ボロンマはビニールのヒモをしゃぶる

ウーガン（その姿を見ると、ニヤリとして）「おいで



ボロンマは不安そうにウーガンの後に付いていく

市場の雑踏はそれらを飲み込んで何もなかったように続いている。

健二ら日本の少年たちが、周囲の雰囲気には圧倒されながらオズオズと出てくる。

健二「添乗員が連れて行ってくれる繁華街より、こんな裏町の方が面白いんや

忠夫「……くわあゝ 上げえな！

茂 「お祭りの夜店みたいやな

真一「ほんなものとは比べもんにならないわ。

健二「僕も前からいっぺんこんなところ来たいと思ってたんや。

晴彦（不安になって）「……もう、帰ろう。先生らにこんなところ来たってわかったら怒られてしまう

真一「うるさいな、おまえは。帰りたい奴は、自分一人で帰れ。

晴彦「どうして帰ればいいのかわからん（ベソをかき始める）

真一「ほやったら、黙って付いて来い

うろうろしている少年たちを金を持っていそうな日本人と見て、早速物売りの子どもらが寄ってくる

エルデネ「お土産はいらない？

ハーレ「お土産、お土産だよ。ほら、こんなにかわいい人形だ。買ってよ

エルデネ「色々あるんだ。みんな手作りだから、安くしとくよ

品物を売りつけようと呼びかけてくる。強引に何かを手渡そうとしたりする。先程のウーガンが出てくる。媚びたように少年たちに語りかける。

ウーガン「お兄ちゃん、絵はがき買ってよ。

おどおどしている少年たち。要らないと手を振る健二。

ウーガン「きれいな絵はがきだよ。色んなところが出ているよ。ねえ、買ってよお兄ちゃん。

一枚五円だ、十枚だと四十円にしとくよ。ねえ、買ってよ

自分と同じ位の年齢のウーガンが必死で絵はがきを売ろうとしている姿にほだされて

茂 「か、買おうか（と、ポケットを探る）

ウーガン（買ってくれそうな気配を得て一層（媚びた笑みを浮かべる）「ねえ、一枚だけでも買ってよ

健二「いらん、いらん

茂 「ほやけど、可哀想やげ（五十円硬貨を少女に手渡す）  
ウーガン「ありがとう（茂から硬貨を受け取ると絵はがきを渡す。そして）こっちの方は  
もっときれいな絵はがきだよ

馴れ馴れしくなって、更に別なものを売りつけようとする。茂が絵はがきを買ったものだから、他の子も負けじと売りつけてくる

エルデネ「お土産はどうだい。色々あるんだ。  
ハーレ「かわいい人形だよ。

エルデネ「買ってよ、たくさんあるよ  
ウーガン（茂以外の少年たちにも絵はがきを見せる）「他にも、きれいな絵はがきがたくさんあるよ。お兄ちゃんたちもいらさない？ ねえ、買ってよ  
ガントーヤ「鳥の羽で作った飾り物だ。表通りの店よりはずーと安いからね  
テイラー「おにいちゃん、パパイヤいらさないか。

と、いつの間にか先程のボロンマが忠夫にすり寄るように、そして大胆に

ボロンマ「お兄ちゃん、お金頂戴

忠 夫「？

ボロンマ「あたい、昨日から何も食べてないの。お腹空いた、お金頂戴

今にも泣き出しそうな表情で、ボロンマは茂と忠夫を見上げる。二人は同情心と  
気押された想いで、ポケットの小銭を渡す、

ボロンマ「ありがとう

すると、茂の側に別の少女がすり寄って来た。

エルデネ「あたいにもお金頂戴

サイハン「お兄ちゃん、あたいにも

テイラー「あたいにもおくれよ

いつの間にか周囲には何人もの少女達が居る。少年たちは驚き不安になってくる

サイハン「あたいにもおくれよ

エルデネ「この子にあげて、どうしてあたいにはくれないんだよ

テイラー「お金おくれよ

少年たちは怯えて立ち往生、晴彦は今にも泣きだしそうである。しかし道行く人  
たちにとっては特別な事でもなく別段意に介する風でもない。

やがて、年長のリーダー格らしきガントーヤが立ちほだかる

ガントーヤ「おい、絵はがきや土産もんを買う時には、自分の好きな物を選べばいいがな、金を恵んでやる時には、あいつにやってこいつにはやらんなんて事をしたらあかな。な。

ハーレ「あとで貰った者と貰わん者とが喧嘩をするさけな。仲間を乱すことになるんや。金を恵んでやるんなら、あたいがみんなに分けてやるさけ持つてる金、全部出せや。

いつの間にかぐるつと周囲を取り囲んでいる。

大柄なガントーヤに胸ぐらを締め上げられる真一。押しとどめようとする健二がハーレに殴り倒される。それをきっかけに少年らは殴られ蹴り上げられて悲鳴を上げる。そして瞬く間に持ち金や所持品などを奪い取られる。

リーダーが去っていくと、他の者たちも水が引くように消えていく。

健二「……

茂「帰ろう、帰ろう、ホテルに帰ろう

晴彦「もう、こんなところ、いやや、家に帰りたい。早う日本に帰りたい

忠夫「ホテル帰ろさ。

晴彦「携帯電話持ってないし……

真一「……ほの前に警察に行った方が良くも。

健二「うん

泣きじゃくる晴彦、べそをかいている茂と忠夫。辛うじて気持ちを支えている健二と真一。それぞれ鼻血や手足の怪我、埃だらけの服装、シャツなどは引き裂かれている。

健二が無言でみんなを促すと、もと来た方角へ歩き始める。みんなも黙って健二の後を付いて行く

市場の雑踏は何事もなかったように続いている

溶暗

### 第三景

広大なゴミ捨て場。幾つものゴミ山が見える。

ゴミの中から湧き出てきたようにあちこちとうごめくものが見える。老若男女が引っ掻き棒を持って、ビニールやプラスチック、空き瓶、アルミ缶、鉄屑などを掘り出し麻袋や籠などに入れている。ゴミの中から金目のものを探している人たちだ。

あたりには異臭が漂い（これは表現できないが、雰囲気）、所々にはガスが発生しているのか煙が立っている。異様で壮絶な光景である。が、しかしそれらは何処か陽気で、ともするとハイキングで山菜を探しているような、或いは浜辺で潮干狩りをしているようなものにさえ見える。

片隅にゴミ山と見紛うような崩れかけた掘っ立て小屋が建っている。その前の一角が空間に成っている。

夕刻、女の子・アリュールたちが朗らかに話しながら出てくると小屋の中に入っていく。（彼女たちが入っていくことで、初めて観客にはそこが小屋であることが分かる）彼女たちはゴミ山でなく街中のホテルやレストランなどで残飯など食料品を漁って来たのだ。しばらくしてアリュールが、小屋の中にいた別な女性・ムウアーラの体を支えて出てくる。病気なのか、ムウアーラはアリュールにすぎるようにしている。

アリュール「いつ頃だい、ワイゼラが行ったのは

ムウアーラ「お昼過ぎかね。水が欲しいって云うから飲ませてやると、うんうんってうなずきながら行ってしまったのさ

アリュール「苦しまなかつたんだね

ムウアーラ「ああ、眠るようだったよ。

下手寄りに来ると、ムウアーラは周囲の光景を愛おしげに見渡して、

ムウアーラ「今日も一日が終わったのね

いつもそうしているのだろう、そこには背もたれの付いた椅子のようなものが置かれてあり、ムウアーラはその窪みに座り込む。

アリュール「今日はホテルの残飯がたくさん手に入ったのさ。少し食べなよ、……もうす

ぐ、みんな戻ってくるからね。そうしたらワイゼラを送ってやろうよ

ムウアーラ「ありがとう。

ムウアーラの傍らに女の子らが、小さな包み（ホテルから探してきた残飯）を置いて、

クオート「毎日残飯を出すんなら、最初からあんなにたくさん料理を作らなきゃいいのね

チエゲ「ホテルに泊まるような奴らは、食べきれない程の料理を前にしないと気が済まないのさ

クオート「ほとんど手を付けなくて残飯に出すんだもんね。もったいないよ

アリュール「そのお陰で、あたしたちは何とかご飯にありつけることが出来るんだ。有り難いこったよ

チエゲ「今日は向こう岸の奴ら来なかったね。  
クオート「いっつも喧嘩腰の取り合いなのに、お蔭で今日はごっそりあたいたちが頂くこ  
とが出きたよ」

アリュール「今日はみんなに腹一杯ごちそうを分けてやる事が出来るよ」

女の子らは小屋に戻っていく。

ムウアーラはうつろにゴミ山の光景を見ている。

しばらくして、疲れ果てた様子の健二らがあたりを伺いながら出てくる。

真一「道に迷うてしもうたんやな。何処行っても変な所に出してしまう」

茂「だんだん寂しいところに来てしもうたが、

忠夫「言葉もわからんし、これからどうする

晴彦「おかあちゃん」

健二「泣くな！」

真一「なんとか警察を探せば、ホテルに連れて行ってもらえるんやけどな

晴彦「警察なんて何処にもえなんだが

健二「裏町に紛れ込んでしもうたんや、賑やかな表の町に出なあかんのや

忠夫「……もうすぐ暗うなってしまうぞ

茂「……ここで、野宿するんか

真一「仕方ないやろな

健二「夏やさけ寒くは無いやろが……」

晴彦「こんな所で寝るのはいやや。早うホテルに帰りたい

彼らを見つめているムウアーラと目があつた忠夫が突然叫ぶ

忠夫「うわあ！」

ビックリする四人。そしてムウアーラが彼らを見て静かに微笑んで居るのに気づ  
いて再度驚く。

ムウアーラ「どうしたの

真一「あ、あのー

ムウアーラ「見たことのない子たちだけど、何処のグループなの

真一「ぼくたちは、に、にほんから……」

健二（あわてて真一の言葉を遮って）「道に迷ったんです。（小声で真一に）日本人つ  
て分かったらまた何されるかわからんぞ

ムウアーラ「日本の子が、どうして？ ……道に迷ったなんて、（彼らの様子を見てある  
程度の事情を察したようだ）みんなもうすぐ帰ってくるから、それまでここで待つて  
いるといいわ。きつとみんな力になってくれると思うから。」

優しい言葉を掛けられて一時に気が抜けたように、先ず晴彦が泣きじやくりながら、そして茂と忠夫が崩れるように座り込む。

健二「泣くな（と、云いながら真一と共に座る）」

ムウアーラ「お腹空いていない

空腹ではあるが、健二たちは返事をしない

ムウアーラ「日本の人たちの口には合わないかも知れないけど……、ホテルで出されたご

馳走よ

先程アリュウが置いていった包みを開けて、少年たちにおにぎりのようなものを分け与える。しかし健二たちは手にしたまま誰も食べようとはしない。

間、ムウアーラが小さな固まりを口にする。

ムウアーラ「おいしい、

少年たち黙って食べ始める。

晴彦「おかあちゃん」

健二たち「……」

堪えきれずに晴彦がまた泣き出す。が、健二は何も云わない。黙々と食べている日本の少年たち

ムウアーラ「……私ね、日本の歌、知ってるよ。……（たどたどしく唄う）♪かあさんが

夜なべをして 手袋編んでくれた 木枯らし吹いちゃ 冷たかろうて せつせと編ん

だだよ……。

健二たち「……」

ムウアーラ「……私の村にね、ものすごく年を取ったおじいちゃんが居たの。戦争で日本からこの国に来たんだって云ってたけど、戦争が終わっても日本に帰らないで、私たちの村でお嫁さんを貰ってそのまま住んでしまったんだって。

健二たち「……」

ムウアーラ「年取ってからは、家の軒先でいつもカゴやザルなんかを編んでいたわ。村の子どもたちが、おじいちゃんの所に集まってよく話を聞いていたわ。あたしが村を出るときこの歌を覚えてくれたの。

真一「……戦争が終わったのに何で帰らなかったんかな？

ムウアーラ「日本に帰っても居るところがなかったんじゃない？ 日本は豊かな所って聞いているけど日本にも貧しい人たちがいたんだね。……♪母さんは 麻糸つむぐ 一日つむぐ お父は土間で わら打ち仕事……」

その内二人、三人とゴミ山から子供達が帰ってくる。ほとんどの者が10歳前半位までの子供たちである。だぶだぶのTシャツにズボン。サンダル、中には破れたズックを履いている者もいるがほとんどは裸足である。すべてその折々に拾ったあり合わせのものを身につけている。

子どもたちは別に健二たちを気にとめる風でもない。談笑、雑談している者、麻袋の中のものを取り出してより分けている者たち。

ビニールのヒモを噛んでいる者やシンナーの入った袋をくわえている者、タバコを吹かしている者たちもいる。一樣に大人ぶった会話、動作であるが、彼、彼女たちは確実に子どもであることがはっきりとわかる。

彼らは何かを持っている様子である。

ドウンゴ「どうだ、今日の景気は

カマデ「駄目だ、駄目だ。

ジーリア「近頃は金目のものがちつともありやしねえや

アンデウ「去年なんざ、半日も出てりや、結構稼げたのにな。この頃はさっぱりだ

ジュウエリー「おい、プラスチックやるよ

ドウンゴ「そうかい、すまねえな。んじや、少ねえがビニールやろうか

ジュウエリー「ありがてえ、俺あ今日はビニールだけを集めてたんだけ

アンデウ「だれかタバコくれねえか

スアドウ「ああ、

アンデウ「へえー、いいタバコ吸ってるじゃねえか

ジーリア「俺も、貰うぜ

スアドウ「今日の収穫よ、まるまる一箱紛れ込んでいたのよ

アンデウ「ちえ、上手くやりやがったな

ジュウエリー「お前、シンナーはやめたほうがいいよ。

ドウンゴ「そうだその内、頭がスカスカになって、からだかボロボロになっちゃうぜ

カマデ「なあゝに、かまうもんか。その時や、その時よ。

ミュウヨ「マーシーなんか、すっかりいかれちゃって、おっ死んでしまったもんだよ

ジュウエリー「ありや、ひでえもんだったよな

次第に人数が増えてくる。

その内回収業者の男が荷車を引いて出てくる。子供たちがゴミ山や街中から集めてきた、いわゆる再利用資源を秤買いするのだ。

広場の隅に荷車を据えると、男は秤を取り出し周囲の子どもたちに呼びかける。

男「おおい、みんな戻ってるかなー 今日収穫はどうだったい

子供たちは荷車の周りに集まり、男が手にする秤のフックに自分の麻袋を吊す。そしてごまかされないように秤の目盛りを食い入るように見ている

男 「三キロ

ドウンゴ「ちえ、三キロか、もつとあると思つたのにな

男 「ん？、おう、六キロだな、へー、スアドウ今日はお前、稼えだじゃねえか  
スアドウ「へへへ、ちよつと穴場を見つけたんだ

アンデウ「よう、明日俺をそこへ連れてつてくれよ

スアドウ「へへへ、だめだな、俺一人の、秘密の穴場だよ

アンデウ「ちえ、ケチな野郎だぜ

男 「よし、四キロ。

カマデ「……

ドウンゴ「なんでえ、駄目だ駄目だなんて云つてながら、お前結構稼いでるじゃねえか。

男 「よし、お前も四キロだ。

ジーリア「ま、こんな処かな

アンデウ「どいつも、こいつも、いやな野郎だぜ

男 「お、ルーシーか、どーれ、んー、二キロだな。……小さいのに、おめえはいつつ  
も偉えな、

ルーシー「うん、（四、五歳くらいの女の子）

男は次々と子供たちの袋を秤に掛け、それに見合う金を渡していく。

商い（？）の濟んだ子供たちは再び三々五々と広場の所々に集まり、ふざけあつたり、雑談やトランプゲームに興じている。

男 「これはー んー、四・五キロだな」

トウーリ「なんでえ、五キロにしてくれよ

男 「わしだつて、これでメシを食つてるんだからな。同情してたら干上がつてしまふ

トウーリ「もうちよつとじゃないか、まけてくれよ

男 「だめだ、だめだ

トウーリ「ケチなこと云うなよ。ほれ、針は五キロに近いんだぜ。もうちよつとじゃない  
か、

男は秤から袋を取るとその場に捨てるように放り投げながら。

男 「じゃ、その、もうちよつとの分を入れるか取るか、どっちかにして持つてこいよ。

ガタガタ云うんなら、秤に掛ける前に丁度の五キロか四・五キロにしておくんだな

トウーリはいきなり荷車をけつ飛ばして

トウーリ「へん、丁度にしてから秤にかけるんなら。お前の秤は何のためにあるんだい

男 「何だとお



トウーリはふてくされたように袋を肩にすると、ゴミ山に戻っていくと、そこへいきなりサッカーボールが飛んでくる。ある少年が素早くそのボールを足で受け、飛んできた方に蹴り返す。ボールを追って出てきた少年がそれを受ける。一緒に追ってきた幾人かの少年と広場にいた少年たちが入り乱れてサッカーを始める。他の者たちも一斉に囃しながら応援を始める。やがてリーダー格の少年・チュウバが思いっきりシュートするとボールは反れて健二たちの居る所に飛んでくる。思わず健二はゴールキーパーのようにガツシと両腕でボールを受け止める。意外な出来事に舞台は一瞬停止する。そしてふっと気付いたようにみんなは思わず拍手をして健二の身のこなしを讃える。

チュウバ「いよう、結構やるじゃねえか。さあ、蹴りな、

今度は真一がサッカーボールを蹴る。一斉にみんながボールを追いかける。おどおどながら仲間に混じった日本の子どもたちもボールを追いかけるうちに次第に元気が出てきた。その光景は一景のホテルロビーでの健二たちの姿と同じである。いつの間にか即席の親善試合がはじまった。

みんなは健二たちを気に入ったようである。やがて（一汗流したところで）

チュウバ「気に入ったぜ。何処のグループの者だ

健二「ぼ、ぼくらは……、（とたんに、今までの情けないグループに戻ってしまった）

ムウアーラ「迷子になったんだって

チュウバ（口ごもる健二らを怪しみもせず）「そうかい、そんなことあ、どうだっさい

んだ。サッカーの上手い奴はみんな俺たちの仲間だ。おおい、仲間だぜ。サッカーを

やろうとよ

チュウバは有無を云わせず健二たちをみんなの輪の中に連れ込む、

みんなも歓声を上げると、戸惑っている健二らを取り囲み込み握手をしたり、抱き合ったりして健闘を讃え合う。サッカーを通じて気持ちが一いつになったのだ。

アリユー「チュウバ、ワイゼラが行っちゃったんだよ

チエゲ「昼過ぎなんだってさ

クオート「さつき、体は拭いてやったんだけどさ。今夜送ってやらなけりやね

チュウバ「そうか、近い内とは思ったけどな、行っちゃったか。……よし、おーいみんな

ワイゼラが行っちゃったんだってよ。いつもの通り、送ってやろうや。みんな五十円

ずつ出した、後は俺のおごりだ。アリユー頼むぜ

クオート「今日は向こう岸の奴らが来る前に、ホテルの残飯を大量にせしめてきたんだ。

チュウバ「そりやく豪勢だな。（健二たちに）今夜はお前たちも一緒にワイゼラを送って

くれ。奴も喜ぶぜ（有無を云わせず健二たちを仲間に引き込んでしまう）

チエゲ「さ、さ、みんな準備だよ。食べられそうなのは全部持つておいで

アリュー「ホテルのご馳走だよ。お前たち食ったことないだら  
クオート「今日は腹一杯食わしてやるからね

こんな時、みんなを仕切るのはアリューである。彼女の甲高い怒鳴るような声が響きわたる。

子ども達は歓声を上げながら、準備をすべく四方に散らばりたき火をする木屑や空き缶（食器）などを持つてくる。まるでこれからキャンプファイヤーが始まるような陽気さで準備が始まる。

回収業者の男は麻袋を荷車に積んで帰り支度をしながら、子どもたちの中に混じってウロウロとしている健二たちを怪訝そうに窺っている。

そこへ先程男と喧嘩をしたトゥーリが叫びながら戻ってくる。麻袋に何か大きな物を載せて重そうに引きずってきた。掘り出し物を手に入れたようだ。

男の前にゴロリと転がすと

トゥーリ「おーい、親父。こいつはどうだい。良い値を出さねえとお前にはやらねえぞ

男「なんでえ、こりや自動車の部品じゃないか。どこで見つけてきたんだ、まさかお前、盗んできたんじゃないだろうな

トゥーリ「いらぬ詮索はしないこった。川向こうの間屋に持っていったっていいんだぜ

男「よし、受け取ろうじゃねえか。良い値で引き取ってやらあ、

トゥーリ「んじや、これはどうだ。（先程の麻袋を掲げて）

男「よし。ついでにそれいつもまとめて引き受けるぜ

トゥーリ「だめだ。だめだ、こいつはこいつで別勘定だ。どうだ、

男「……ちえ、仕様がねえな。じゃあ、五キロ、五キロにしとくよ。（トゥーリに五

キロ分の金を払い）その代りこいつはこつちで引き受けさせて貰うぜ。（と、自動車部品の代金を別立てでトゥーリに渡す）本当にがっちりしてるぜ

トゥーリ「お互い様だよ

男は自動車部品を荷車に載せると帰っていく。

その様子を見ていたチュウバは

チュウバ「おい、トゥーリ、お前大金をせしめたな。よし、豚の臓物を買ってこい。ワイ

ゼラが行っちゃまったんだ、お前のおごりだぞ。

トゥーリ「そうか……、行っちゃまったか。よーしまかせておけ。極上のとこ見繕って仕入れてきてやらあ。序でに何かいるものはねえか

チュウバ「そうだな、アリューに聞いてみてくれ

トゥーリは肩を聳やかせ口笛を吹きながら仲間の中に入っていく。

広場の真ん中に火を起こし、鍋代わりのデコボコの大きな缶を据えて、アリューの采配でなにやら煮詰め始める。みんなはその周囲を取り囲み、アリューやチエグ、クオートらの指図で火を燃やしたり、水を汲んできたり、米や野菜などあり

合わせの食料を持ち寄り、切り刻んだり、缶に放り込んだりと大騒ぎである。

カマデ「おい、もっと火を燃やせ

ラングレイ「水が少ないぞ、誰か汲んでこい

ドンゴ「アリュール大丈夫か、代わろうか

アリュール「大丈夫だよ、任せておきな

チェゲ「イモの皮はきれいにむくんだよ。残っていると苦いんだ

スアドウ「水はここにあるじゃないか

ジーリア「その水はだめだ。三日もたつてら。今にボウフラがわくぜ

スアドウ「誰だ、水汲みをしてねえ奴は。

ドンゴ「昨日は俺だったから、今日は……

ジーリア、こそこそと水汲みに行く。

ルーシーが空き缶を持ってみんなから硬貨を集めてまわっている。

ルーシー「五十円出しなよ。今夜はワイゼラを送るんだから、みんな五十円出すんだよ

ルーシーに催促されるとなけなしの金をポケットから出して缶に入れる

中には、持ち合わせがない者もいる。

ルーシー「だめだよ、五十円出さなきゃ。三十円しか入れなかったじゃないか。

アンデュ「すまねえ。今日はからつけつなんだ

カマデ「金を出さねえ奴は何んにも食うんじゃねえぞ

アンデュ「冷てえこと云うなよ。誰か二十円貸してくれねえか

ルーシー「五十円でなきゃ、だめだよ

ジュウエリー「仕様がねえな。俺が貸してやらあ（アンデュの代わりに二十円入れる）

アンデュ「ありがてえ、恩にきるよ

ジュウエリー「ちゃんと返してくれよ。この間の分もあるんだからな

ルーシー「まだ出してない者はだれだ。みんな五十円出すんだよ

この間、日本の子どもたちはみんなの中に入りようもなく、ただオロオロと彼らの手伝いをするだけである。

忠 夫「行っちゃまったって、ワイゼラさんは何処へ行ったんですか

茂 「ワイゼラさんがもう居ないのに、どうして送別会をするんですか？

ムウアーラ「……

チュウバ「ワイゼラは人間を終わったんだよ

忠 夫「人間を終わった？

ムウアーラ「死んでしまったの。人間を終わって、新しい世界に行ってしまったのよ。

チュウバ「この国では子どもは死ぬものなんだ。十歳位までに半分が、一五、六までには

その半分が死んでしまうんだ。俺たちは運良く生き残れるかどうかの境目にいるって事だ

健 二「どうしてそんなに子どもが死ぬんですか？」

カマデ「食えねえからよ。みんなが飢えている。生まれてきてもお母さんのお乳が出ねえからほとんどの赤ん坊が死んでしまう。生き残った奴も三歳にもなれば物貰いや俺たちのようにゴミ山漁りよ。それにしたって満足に食えるモンじゃない。栄養失調で体はガタガタだ、ちよつとした怪我や病気でアツという間に人間とおさらばさ

真 一「お父さんやお母さんは働かないんですか

茂 「子どもを育てるのは親の義務なんだから

ジリア「いくら働いたって、一日百円にもならね稼ぎでどうやって育てていくんだよ。食えなくなったら、家族はバラバラになって、子どもは捨てられるか、売り飛ばされるか、売られる前に親元から逃げ出すしかないんだ。

アンデュ「売り飛ばされたらおしまいだからね。売られた男の子は朝から晩まで死ぬまで酷き使われるか、下手すると臓器移植とかいって体中バラバラに切り刻まれて外国の金持ちに売り飛ばされてしまうからね。

カマデ「女の子だと体を売られるんだ。毎日毎日たくさんのお客を取らされて、その内身体を壊したり病気を移されて、使い物に成らなくなると捨てられてしまう。

ムウアラ「……体中ボロボロにされてやっとの思いで故郷に帰っても、村の者からは病気が移るってんでつまはじきにされ、親や兄弟にも肩身の狭い想いをさせると、居るところがなくて、また町に舞い戻ってくるの。だけどそんな体で生きていく事なんぞ出来やしないわ。……わたしもワイゼラと一緒に道端でうずくまって死ぬのを待っていたら、このみんなに拾われたって訳よ

忠 夫「子どもを売り飛ばすなんて鬼のような奴だな。（ムウアラを見て、ちよつと気まずい感じ）

アンデュ「生きていくためにはそうしなくてはならないんだ。仕方がないんだ。誰も親を恨んではいねえよ。

ムウアラ「……売られていく前の晩、家族みんなでおいしいものを食べたわ。弟や妹は大はしゃぎ。私も初めて日本のカップラーメンを食べた。こんなに美味しいものがこの世にあるなんて知らなかったわ。……私が売られることで、家族がしばらく潤うことが出来る……。あの、楽しかった一晩の家族団らんのために、私は生きてきたんだと思った。

晴 彦「カップラーメン……

いつの間にか陽が陰ってきた。次第に空には星空が広がっていく。

アリユー「そーら、出来上がりだ！

待ちかまえているみんなは欠けた茶碗や空き缶、椰子の実などの殻、板など皿状のものを手にして打ち鳴らし、盛り付けの順番を今や遅しと大騒ぎで待っている。チュウバに促されて健二たちも、そしてムウアラはクォートが介護して、他の

みんなも煮詰まった缶（大鍋）の周りに集まってきた。ホテルの残飯などを既に食べ始めているものもいる。

ミュウヨ「いい匂いだけ。アリュールまだかよ

アリュール「あわてるんじゃないよ。じっくり煮込んで味を染み込ませなくっちゃね

カマデ「たまんねえな

クオート「がつつくんじやないよ

アリュール「今夜は豚が一杯入ってるからね。味は特上だ。

ミュウヨ「イエーイ、やったぜ

トウーリ「豚は俺のおごりだ

ラングレイ「もつと、もつと、入れてくれよ

チエゲ「いくらでもあるんだ。食ったら、お代わりをしなよ

ミュウヨ「あちちち、口が焼けそうだ

チュウバ「みんな聞いてくれ、今日の昼頃、ワイゼラが死んだ。人間を終わって、新しいどっかの世界に行ってしまった。あいつは次は犬が良いと行ってたから犬に成るかも知れねえな。今度見たことのない犬が、ここらあたりをうろついていたら、いじめたり、捕まえて食べたりしちやいけねえぞ。それはワイゼラが俺たちの所に帰ってきたんだからな。

アンデュ「あんな痩せっぽ食っても上手くねえや

クオート「俺が飼ってやらあ。毎日ゴミ山を連れ歩いてやらあ

ドンゴ「お前なんか、ワイゼラの方が喜ぶもんか

クオート「なんだとう

みんなの弾けるような笑い声。

ジュウエリー「そうよなあ、ワイゼラはいっぺん俺たちと一緒にゴミ山に行きたいって云ってたな

スアドウ「あいつはここへ来てからは寝たつきりで、何処へも行った事がなかったんだ。

今度は連れて行ってやろうよ

チエゲ「そうだ、ムウアーラも気分の良いとき一緒に行くんだ

晴彦「何だかみんな楽しそうですね

茂「仲間のワイゼラさんが死んだと言うのに、みんなは悲しくないんですか

チュウバ「順番が来ただけさ。別に泣くこともないし、騒ぐこともないやな。人間を終わることが出来たワイゼラのために一緒に喜んでやるのさ。

アンデュ「俺たちだって、これからどうなるかは分からない。……朝起きると、今日が始まる。今日生きるために俺たちは必死で知恵を絞る。そして夜まで生き抜いていくんだ。昨日が今日になって、明日になって行くんだ。

忠夫「ムウアーラさんの将来の夢は何ですか？

ムウアーラ「夢？

忠夫「ムウアーラさんは将来何に成りたいんですか。希望は？

ムウアーラ「……希望なんて、そんなこと考えたこと無いわ。人間を終わるまで精一杯生きるだけだから将来の夢なんても持ったことがないわ  
忠 夫「……」

ムウアーラ「……チュウバの夢は生き残ってサッカーの選手に成るのね  
チュウバ「川向こうの地区に小さなサッカー場があるんだ。週3回教室が開かれている。国と州が後押ししている教室だから、優秀な奴は選手になって試合に出られるんだ。今度も日本から来るチームと親善試合があるんだ」

晴 彦「僕たちそれに出るために日本から来たんだよ。  
チュウバ「本当か」

真 一「じゃチュウバたちと一緒に試合が出来るね。」

チュウバ「……俺は選手じゃない。俺たち教室には余り行かれないんだ」

健 二「どうして？ だってみんな上手だったじゃないか」

チュウバ「あんなものでは駄目なんだ。もっと強くならなければお前達に勝てるような選手にはなれない。」

晴 彦「僕なんてめっちゃ下手くそだよ。親善試合なんだから、みんな仲良くサッカーをするのが目的だって監督も先生も云っていた」

チュウバ「試合には勝たなければ行けない。勝てる選手で無ければならない。」

ムウアーラ「その内チュウバはきつと選手に選ばれるわよ。」

茂 「君たちのチームが武生に来て一緒に試合が出来るよと良いな」

真 一「健二、今度は武生で親善試合が出来るよう、お父さんに話してみろよ」

みんなは盛り上がっている。

ミュウヨ「ムウアーラ歌を唄いなよ」

アンデュ「そうだ、ワイゼラといつも唄ってたやつだ。」

ムウアーラはそつと健二たちを促し、

ムウアーラ「あんたたちも一緒に唄って」

「かあさんの歌」を歌い始める。みんなもつられるように唄う。

満天の星が輝いている

やがて疲れてしまったのか、一人二人と唄う者が少なくなりやがて静かになる。

眠ってしまったようだ。

あとには、満天の星が輝いている

ムウアーラ「美しい星。」

そして日本の少年たち、それにムウアーラも眠ってしまった。  
長い間。余韻を残し、やがて舞台は次第に明るく成ってくる。

小鳥の声、おだやかな夜明けだ。人間の行為を超越した自然の営みである。と、ゴミ回収業者の男が出てくる。子ども達の間を探り、日本の子どもたちを確保すると今出てきた方に手招きをする。あたりの静寂を破るように突然警官が踏み込んでくる。続いて保護者や引率役員、現地の役人たちが出てくる

警官1「起きろ！ 起きろ！ みんな起きるんだ！

警官2「お前たち、昨日、日本の子どもにも土産物を無理矢理売り付けただろう。

現地の役人「それに暴行を加え、金や持ち物を奪って逃げた。

警官1「日本の子どもを連れ込んで此処に監禁した

警官2「首謀者はお前だな。日本人子弟への暴行、窃盗、

警官1「それに拉致・監禁で逮捕だ。

口々に罵りながらたたき起こしていく

いち早く、日本の父兄たちが健二たちを保護し、連れ去っていく。

保護者A「無事で良かった。怪我は無かった。酷いことをされたんでしょ

保護者B「可哀想に、だから子どもだけでホテルを出ないと云ったのに……

引率役員「ま、とにかく無事で良かった

怒号・喧噪の中、

溶暗

#### 第 四 景

輝いている星空

前場、ストリートチルドレンたちのパーティの光景。しかし無言である。

武生少年サッカーチームのメンバーたちが観客に語りかける

健 二「僕たち5人の失踪騒ぎで親善試合はめっちゃめちゃに成ってしまった。元はと言えば僕たちが探検などと云って勝手に町に行っただけが悪かったのだが、事件は地元

のストリート・チルドレンたちが日本の子どもを拉致・監禁したという事に成って、その事ばかりが大きく報道されてしまった。

晴 彦「僕たちがどんなにチュウバたちの事を説明しても、それは脅かされて僕たちがチ

ュウバたちをかばっているようにしか取って貰えなかった。

茂 「チュウバたちがその後どうなったのか、僕たちには正確に分らないが、ただ、

聞くところによると、僕たちがヒーローみたいに報道されているのとは違い、彼らの

多くが児童監察所みたいなどころに収容されたということだ。

真一「一晩の出来事だったけれど、僕たちは貴重な体験をすることが出来た。僕たちがどんなに恵まれているかと云うこと。

忠夫「その一方で世界には僕たちと同じ子どもたちが、どれほど酷い環境の中で生きて行かなければ成らないかと云うことだ。それを知った僕たちはこれからどうすればよいのだろうか……、

続けて、他の出演者たちが今回の劇制作に携わった感想を語っていく。(メモを  
読んでも良い)

大友奈々「こころでなかよしがたくさんできました。そのお友だちをたいせつにしたいです。ありがとうございますようにになりたいです。

蜂谷安李「はじめてやったとき、だいたい本を見たらおぼえられないと思いました。うちでれんしゅうをなんかいもして、こころにいったらできるようになりました。うれしかったです。

蜂谷友梨「このげきをやって、聞いただけと分らなかった、まずしい人たちのことが、動きや言葉をつけただけで、苦しみやどんな生活をしているかということが、とてもよくわかりました。

フェルナデス愛友美「私はこのげきをしてどんなにまずしいひとたちがくるしんでいるのかよく分かりました。これからも、水や食べ物をたいせつにしたいです。

上嶋梨央「わたしはユニセフぼきんをしたり、ペットボトルのキャップをあつめたり、小さくなった服を送って少しでもその子たちの生活がかわるなら、集めたり送ってあげたりしたいです。

大友航明「今まで「げきだんこころん・星空のかなたに」をしていて、日本とはちがいはかの国々ではまずしい生活をしている人がいっぱいいることを知ることができました。ほかの国々の子どもたちも、ぼくたちみたいに、ゆたかな生活ができるように、これから「ぼ金かつどう」や「ペットボトルのキャップあつめ」などを、せつきよくてきにとりくんでいきたいです。

大友春奈「この劇をとおして、私達とは生活のしかたが違う子供達と出合いました。私達はあたりまえのように、ご飯を食べたり、学校に通ったりしていますが、世界じゅうのみんなが、私達と同じような生活をしているのではないということを知りました。今、あたりまえの生活が、できていることに対して感謝の気持ちを、忘れないようにしていきたいです。

井上朋子「わたしは、げきをしてほかの国の人はお金がなくても楽しく協力して生活している事がわかりました。

清水真夕「このげきだんを、はじめてから、わたしはいろいろなことを知った。たとえば、まずしい国のこと。私たちはへいきで、ごはんをあたりまえにたべているが、まずしい国にすんでいる人たちはなにもごはんもたべられない。わたしはとてもまずしい国のことを、たくさんしった。

米野風紗「まずしくても、一生けん命一日一日を大事にいきいて、とてもすごい思い



ました。

大友香奈「私は、生まれた時から、今までずっとお母さんのそばにいて、あたたかいごはんを食べて、あたたかいおふとんでねて、こんなあたり前の生活ができていたのに、世界の国々には、こんなあたり前の生活ができない子がいるという事が分かりました。あたり前だと思つて、今までの生活に感謝しないでいた自分がはずかしいです。私はしょうらい、いろんな事に、感謝できる大人になりたいです。

満天の星が輝く。

再び、武生少年サッカーチームのメンバーたちが語る。

健 二「おそらく、もう僕たちはチュウバ達と出逢う事は無いだろう。だけど、あの晩のように、輝くこの星空のかなたには彼らが居るのだ。

茂 「親善試合が出来なかつたと云っているが、僕たちはあのゴミ山の前でチュウバたちと親善試合をすることが出来た。僕たちはサッカーを通じてチュウバと心が通じ合う事が出来たのだ

真 一「誰にも理解されない事だが、僕たちとチュウバやムウアーラたちとの間に芽生えた友情はいつまでも消える事はない。

忠 夫「この星空に向かって話しかけると彼らは答えてくれる気がする。僕らとチュウバやムウアーラの心は繋がっている。

晴 彦（思わず叫ぶ）「ムウアーラ！

静寂のあと、

たどたどしく唄うムウアーラの声。

声 「♪ 母さんは 麻糸つむぐ、一日 つむぐ お父は土間で わら打ち仕事

お前もがんばれよ……

やがてストリートチルドレンたちの唄声に代わっていく。

そして、ムウアーラの声が重なって聞こえる

ムウアーラ「わたし、希望なんて考えたこと無いって云ったけど。……夢なんて一度も持ったことがないっていったけど、……だけど、だけど、本当云うと、健二たちに逢えてからもう少し生きて居たいと思うようになった。……チュウバがサッカーの選手になつて日本に、日本の武生と云う所に行けるまで、もうすこし生きていたいと……。

歌声が続いている。流れ星が一つ落ちる。

幕が下りる

武生青年会議所・感謝の「こころ」育成委員会事業、「劇団こころん」上演  
時／二〇一〇年八月二十九日午後一時、於／越前市いまだて芸術館

公演を前にして（8月13日）、キャストの子ども達に感想文を提出してもらった。その幾つかを劇中で使用したが、他にも左記の未使用の感想文が寄せられている。参考までに提示しておきたい。

上嶋梨央〓わたしはユニセフぼきんをしたり、ペットボトルのキャップをあつめたり、小さくなつた服を送って少しでもその子たちの生活が変わるなら、集めたり送ってあげたりしたいです。

石山みのる〓こどもがゴミ山に行つて、ゴミを売つて生活しないといけないなんて、かわいそうだと思います。

田川裕太〓いつも子どもがはたらかないといけないのがへんだと思います。

清水玲奈〓わたしは、まずいいくにのことをしりました。わたしはまずしい国に生まれなくてよかったです。

松崎 空〓子どもがいつもゴミ山で、死ぬまで働くなんてかわいそうだなと思いました。天勝小桃子〓ゴミ山にすんでいるのがかわいそうです。わたしはクリスマスとかに、いろいろなものをたべていても、まずしい人たちはたべられたとしても、すこしかたべられません。わたしはそうゆうくにの人がかわいそうだなとおもいます。

八十島仁也〓ぼくはげきだんに入って日本っていいなと思いました。ごはんも食べれないほど外国のまずしい人はお金がないんだなとびっくりしました。

永野詠子〓私はえんげきをして、まずしく生活している子がかわいそうだなと思いました。まずしい子たちがどんだけ苦労した生活をしているかがわかりました。

川端祥太〓自分たちが恵まれているのが分かっていい体験になりました。石山香純〓私はとてもめぐまれているんだな、と思いました。大事な事を学べたかな、と思いました。

大谷結衣〓自分たちはとてもめぐまれているということがわかりました。このげきでストリートチルドレンメンバーのやくをやつて、これからはいろいろきをつけたいと思うようになりました。

橋本葵花〓わたしは、いまのくらしが当たり前だと思つていたけど、げきをして、このくらしが当たり前じゃないと知つて、これからは感しゃしようと思つていました

\* \* \* \* \*

へ尚、稽古期間中に武生青年会議所を通じて何度かストリートチルドレン救済のNGO活動をしておられる方を招いての話し合いやビデオの観賞会がもたれ、その都度メンバーから感想文を提出してもらつた。これも参考までに提示しておきたい

\*ごみ山で住んでいるのでかわいそうです。私はそのような国でうまれなくてよかったです。

\*外国にはゴミの山に住む人がいるなんておどろきました。同じ地球なのにすむところが違うだけで生活がかわる事をはじめて知りました。その話を聞いて私は日本にうまれてよかったですと思いました。

\*私は他の国の映像をみて日本に生まれてよかったですと思いました。その訳は、ほかの国では線路の上で暮らしている人や川の水で歯を磨いているからです。今の日本では、たんにじょうびやクリスマスにはほしい物を買ってもらえたりして、ぜいたくだと思います。私たちは当たり前のように毎日きれいな水を使っているけれど、まずしい国では違うのでこれからは無駄づかいしないようにしたいです。

\*私はゴミの山などあるところに行ったら、日本がうらやましくその国にいる人がかわいそうだと思います。でもその国に住んでいる人ががんばって他の国へ歩いて行くのがすごいと思いました。食べ物が少ないてまずしい子どもが働いて、お金がないから学校にもいかず働いて家族のために一生けん命がんばっているんだと思いました。日本に生まれてよかったですと思いました。

\*私は映像をみて、外国ではくらしがたいへんだと思います。もしも、私がそうなら一日もたえられないと思います。私は生きていくのにくろうしない。日本に生まれてよかったですと思いました。

\*映像をみて私は本当に日本にうまれてよかったですと思いました。日本の暮らしは外国からすればごうかなくらしだと思いました。水道のじゃぐちをひねれば、おいしいお水もおゆもすぐに出るし、病院もあるし便利だと思います。川の水で顔を洗ったりさらを洗ったり、トイレにも使うなんてびびりました。これからは、ペットボトルのキャップをあつめたり、ぼきんをしたりする事で子どもたちのくらしが少しでも良くなるなら私も協力したいと思いました。

\*私は日本という国に生まれ、今まで当たり前のように食事をしたり、学校へ通ったりしていました。しかし、世界中が私達のような当たり前の生活をしているのではなかったのです。私達が学校へ通っている時間、他の国では学校へ通えずに、家の仕事などを手伝わなければいけない子がいるのです。このように、自由な生活が出来ない子供達がたくさんいるのです。私達は、わがままばかり言っていますが、わがままばかり言える生活が出来るといことはそれだけ自由な生活をしているということ。牧野さんの話を聞いて、当たり前前の生活が出来ていることに感謝しなければいけないと改めて実感しました。

\*私は映像にあった国があるとは知りませんでした。私はあんな国にすみたくありません。まずしい国の子どもたちがかわいそうです。みんなで、いっしょに、なかよく、くらしたい。

\*僕は話をきいて、日本はとてもゆたかな国だと思いました。まずしい国の人達は、お金がなくて困っていたり、食べ物がないで困っていたりして、とてもかわいそうだと思います。子どもたちはお金を集めて、そのお金はぜんぶ、お母さんやお父さんに使われてしまつて、子どもたちはお金を集めても、自分の物を買つてもらえないという事が分かりました。

\*私は話を聞いて、他の国では、小さな子供が働かなければいけないので、日本に生まれてよかつたと思いました。外国の子供たちは、お金を集めて決められてお金を集められなかつたら、ご飯を食べられない子供もいて、かわいそうだと思います。お金がほしいと言われて、一人にあげてしまうと、他の子供も寄つてくるから、あげないほうがいい事も初めて分かりました。お金をお父さんやお母さんは食べるためではなく、遊びなどに使う人もいて、ひどいと思いました。おなかの中に虫がいるからお腹が大きく、手足は細い子供がいてびつくりしました。ゴミ山で働かせられて、汚い空気がゴミ山の近くにある家に入り、たくさんの人が病気になるってかわいそうだし、ゴミ山で働けといった人はとてもひどいと思いました。私はそういつた家に生まれなくてよかつたと思いました。

\*私は話を聞いて、日本じゃない他の国の子供たちは、まずしくて毎日学校に行きたくても行けない。そして、学校のかわりに毎日、大変な仕事をしなくちゃならないという事が分かりました。それにお金をもらつてこなければ、なぐられたりするなんてかわいそうです。私達は、仕事もしなくてもいいし、お金をもらつてこなくてもなぐられません。私は、当たり前前に日本に住んでいて毎日おいしいご飯も食べているけれど、それは、お父さんやお母さんのおかげでご飯も食べて、ふつうに生活も出来ているので、当たり前のように何も手伝いなどしないでご飯を食べて家に住んでいるなんて恥ずかしいです。それに対して、他の国の子供たちは、毎日、仕事をしているけど、お金がなくてご飯もまともに食べれない。家もなく、外で生活しなければいけない子もいるので、私は、これから、他の国の子供たちみたいに毎日、家の仕事をしてあの子供たちを見習おうと思います。それに、もしも、私が、あの貧しい国に生まれたら、あの子達のようにすさまじい生活に耐えれないと思います。それに、いきなりその国につれてこられても、お母さんやお父さんどこにいるか分からなくて一人で町をぶらぶらして迷子になっているかもしれない。でも、まずしい国の人達はまずしいからこそ助け合つて、優しい人達がたくさんいると思うので、私に、何がどうなつたか、聞いてくれると思います。でも私は、他のまずしい国では生活ができないと思います。私は日本にみんながいるのは当たり前ではないということが分かりました。これからは、日本にいる事をありがたいと思つて、毎日お父さんやお母さんのお手伝いをしようと思います。

〈5月25日〉

\*シンナーを飲まなくてはいけないほどまずしいのなら日本人はばきんをたくさんして少しでも助けてあげて幸せにしたいです。

\*僕は先生の話やテレビを見て思ったことがあります。

先生は、自分の子供を幸せにしてあげたいという気持ちで、お金持ちの人に自分の子供を預ける親がいるといいました。僕は、おかしいと思います。それは母親が命がけで産んだ子供を預けるなんて信じられません。子供が欲しいと思わずに、どうでもいいように産んでいるみたいだからです。

自分の子供をよその人に預けるのは、子供がいると面倒でわがままを言ったりするからだと思います。僕は子供とはそのような人間だから仕方がないと思います。自分は親に面倒をかけたりにしているのに、ふつうに住めていて生きているからひきょうだと思いません。

\*私は貧しい国のビデオをみせてもらいました。日本のお隣の国はともまずしい国でした。道路で絵を書いたり、道路で生活をしていました。そして、まずしいので、悲しんでいる人もたくさんいました。ほかの国からだまされて、お金のある場所に行ったつもりがゴミ山に行った人もいました。そして、食べるものもなくて、たくさんの人が悲しんでいました。病気になってもお金がなくて病院で薬をもらうこともできません。私は、どうにかして貧しい国を守ることは出来ないのかと思いました。フィリピンは、家で暮らす人はほとんどいませんでした。食べ物を食べていないから逆にお腹がふくれる事を知りました。食べ物を食べていないと栄養を取ってしまう虫がいることも知りました。世界にはたくさんのおいしい国があるんだと思いました。日本に生まれることができて良かったと思います。まずしい国を日本みたいにごうかな国にしたいと思いました。これからは世界を大切にしたい。

～6月1日～

\*話を聞いて僕は日本に生まれてよかったと思います。その訳は、外国は川でトイレをしたり、遠くはなれた川に水をくみにいかなければいけないからです。日本は、クリスマスもあればお誕生日にプレゼントを買ってもらえる日本はぜいたくだと思います。

\*私は話をきいてこれからは食べ残しをへらし、募金をこころがけようと思います。

\*私はゴミ山に住むのならばいっしょうけんめい働いてお金を貯金して違う国へ行きます。でも最初のお金は洋服のお金や食べ物のお金に使います。私は日本に生まれてよかったと思います。私も牧野さんみたいに世界を旅してみたいです。

\*話を聞いて感じたことは、私たちの日本の生活とかけ離れていて、あまりぴんときまませんでした。私は今の生活が好きです。でも、同じ地球にすむ人間なのにあまりにも生活が違うのはおかしいと思いました。生きたいけど食べ物がないで死んでいく子供たちがいることを知って、私はいっしょうけんめい生きていきたいです。私は、まずしい子供たちのために出来ることといえば募金をするとかしか思いつきませんが、何か手助けが

できればと思います。

⑤私はいらなくなった服を送ったり、ユニセフ募金をしたり、ペットボトルのキャップを集めたりする。私は一人だけの力では何も出来ないのですがみんなが協力し合うことが大切だと思う。

\*もつとお母さんのお手伝いをしたい。

\*私は映像にあった国のために出来るだけ募金して無駄づかいをしないようにしたい。ペットボトルのキャップを集めるといことは学校でやっているでこれからもやろうと思う。

\*これからお母さんのお手伝いなどしていきたい。これからも日本を大切にしたいです。貧しい国の人達もかわいそうだけど自分の命も守りたい。貧しい国をみて日本人はお金もあるのに貧しい国はもたえないなんてとても可愛そうです。日本人はずるいと思いました。

\*私はペットボトルのキャップを集めて外国の子供たちにワクチンを送りたいです。

〈7月5日〉 以上